カトリック 仙台教区報

No.247　2022年8月7日

発行：カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel.(022)222-7371 Fax.(022)222-7378
発行責任：仙台教区広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

仙台教区のシノドスへの取り組み

世界代表司教会議 第16回通常総会

(Synodus Episcoporum)

テーマ：「ともに歩む教会のため――交わり、参加、そして宣教」

1．シノドスとは

教皇パウロ６世は第二バチカン公会議で提唱された教会の刷新のため、1965年9月15日に、「世界代表司教会議」の設置を決定しました。

この一定時に会合する司教たちの集会は「シノドス」として知られています。シノドスは「共に歩む」という意味を持つギリシア語です。

世界代表司教会議には、「通常総会」、「臨時総会」、特定地域または複数の地域に直接に関連する問題を取り扱う「特別会議」、という三つの集会区分があります。シノドスには、決定権はなく、参加者が話し合ったことをまとめて、教皇に提言として提出します。これらの提言を踏まえて、教皇はシノドス後に使徒的勧告を発表します。

第１回シノドスは、1967年に開催され、ほぼ２～４年ごとに開かれています。

第15回通常総会は、2018年10月、開催され、そのテーマが「若者、信仰、そして召命の識別」でした。

第16回通常総会は、2023年10月にローマで開催される予定です。テーマは『ともに歩む教会のために：交わり、参加、そして宣教』です。ですから今回のシノドスのテーマは、「シノダリティ（シノドス性）」、すなわち、教会の共に歩む姿勢、あり方そのものです。今回のシノドスは、信徒、修道者、司祭、司教、教皇を含む神の民全体で、この総会の道を準備し、以下の行程で進んで行きます。

- 2021年９月７日、シノドス事務局から「準備文書」「手引書」が公表される
- 2021年10月から、 各教区でシノドス期間の開幕式典
- 2022年６月４日、日本の各教区が日本司教協議会へ意見書を提出（教区フェーズ）
- 2022年８月15日、そのまとめを教皇庁シノドス準備委員会に送付
- 2023年３月、アジアでのまとめ（大陸フェーズ）
- 2023年10月、バチカンでの総会 （普遍教会フェーズ）

2．仙台教区の取り組み

2019年11月の教皇フランシスコの日本訪問の喜びの雰囲気がまだ残っている、2021年10月10日、シノドス開始が宣言され、仙台教区はその「シノドス」の呼びかけを感謝と喜びのうちに受け取りました。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大によるミサの自粛とともに、すべての教会活動が停止という状況におかれ、教区の取り組みが制限されてしまいました。

さらに、教区長空位の時期にあったため、司祭評議会、宣教司牧評議会、その他の教区主催の活動ができず、この点でも「シノドス」の準備が滞っていた時期でした。

このような中でガクタン司教の任命と着任が仙台教区を喜びに包みました。任命は2021年12月であり、着任は2022年3月でした。任命からの３カ月はコロナ感染症の拡大もあり、進みが鈍かったものの、４月からは教区内小教区でも教会活動が再開されるところも増え、新司教の積極的な呼びかけにより、主日のミサ、シノドスの話し合いの集まりも急ピッチで行われはじめました。

新司教は「シノドス」の取り組みを今回限りのものではなく、これからの教会の歩むべき方向性であることを私たちに伝え、たとえ今回の取り組みが不十分なものであっても、大丈夫なのである。なぜならば､「シノドス」は「旅する教会」そのものである､と宣言してくださいました。

シノドスへの教区内の取り組みは、大きく分けると、日本籍信徒の取り組みと、外国籍信徒の取り組みに分かれました。

昨年末に司祭団月例会において、シノドスの取り組みについて説明がありましたが、コロナ禍のため、十分に話し合うことができませんでした。地区としての取り組みの報告書が送られてきたのは８地区の内、１地区のみであり、小教区の中でシノドスの話し合いを行い、その結果をまとめたのは、53小教区の内、2小教区だけでした。その他に小教区にアンケートを配布し、それに答える形で回答を寄せてくださったのが､11小教区のみでした。このアンケートに答えた信徒の数は、教区の信徒の２％に相当する205人でした。

外国籍信徒の取り組みは、ベトナム籍信徒にはベトナム籍の修道者が、フィリピン籍の信徒には、仙台教区の滞日外国人支援センターのスタッフがアンケートによる参加を呼びかけ、総数151人分のアンケートの結果を、教区内の外国籍信徒の報告書にまとめました。

外国籍の信徒は、１つの小教区にとどまらず、複数の小教区で活動しているので、把握するのは難しいのですが、担当者の尽力もあり、15％を超える参加になりました。10の質問事項をアンケートの形にし、5か国語（英語、タガログ語、ベトナム語、韓国語、スペイン語）に翻訳しました。このアンケートの回答者は、151人で、青森県、岩手県、宮城県、福島県の全域に及んでいます。

シノドス事務機局による準備文書にある10項目の設問に従って意見聴取が行われました。

質問１．旅の同伴者
質問２．聴くこと
質問３．声に出すこと
質問４．祝うこと、典礼
質問５．宣教における共同責任
質問６．教会と社会における対話
質問７．エキュメニズム・他のキリスト教諸派とともに
質問８．権威と参加
質問９．識別することと決断すること
質問10．シノダリティの中で自己形成すること

３．日本カトリック司教協議会への報告のまとめ

上記のように、仙台教区のシノドスへの取り組みは、ガクタン司教の叙階式後から活発化したばかりであり、日本カトリック司教協議会に提出する締め切りまで、約２か月余りという段階で、報告書を出さねばなりませんでした。報告書は、５月に行われた司祭月例会で司祭のみに報告され、その後、教区の４役員（司教・司教総代理・事務局長・教区会計）に了承されて、送付しました。

報告書の内容は、以下の通りです。

「はじめに」で、コロナ禍でミサと教会活動の中止、司教空位などでシノドスへの教区としての取り組みが遅れたこと。

１．**教区の取り組みの参加状況**――日本籍信徒の取り組みと、外国籍信徒の取り組みに分けられます。日本籍の信徒と外国籍の信徒が区別なく、取り組むことが理想なのですが、教区内の大多数を占める日本人信徒、司祭に、「シノドス」＝「神の民の旅」の同伴者としての外国籍信徒を意識していないことの表れかもしれません。

2．教区の取り組みの結果――アンケートの結果のまとめ

- 「旅の同伴者」としては、教会で出会う信徒、神父、修道者と答えた人が多く、つながることのできない人としては、ホームレス、移民、難民、貧困者、障がい者などの意見があがっていました。
- 「聴くこと」「発言すること」では、教会指導者との対話と答えた人が多数でした。また、自由に発言する場が教会内にあるとは言い難いと感じている人も多いようです。
- 「祝うこと」は、私たちの生活の中で一番大切なものは何かとの問いに、圧倒的多数の方がミサと答えておられます。コロナの感染拡大のためにミサが自粛されたことが、いかに多くの信徒の方に影響を及ぼしていたのかが感じられます。

「おわりに」――2011年の東日本大震災の10年続いた支援活動は、被災した人々と共に歩む大いなる旅（シノドス）であったとの豊かな振り返りが10の質問に答えるものであったと、述べられています。

シノドスへの旅路の端緒についたばかりで、これからというところですが、ガクタン司教の「シノドスへの取り組みは、今回限りのものではなく、これからの教会の歩むべき旅する教会そのものの歩みです」と励ましてくださいました。

仙台教区の2011年からの東日本大震災の被災者への支援活動を通して、教区が歩んできたことが、そのままシノドス的な歩みと言えます。

4．これから

今回のシノドスの特徴は、旅する教会が、第2バチカン公会議が提唱した「刷新」を、どのように旅をしたか、振り返ることが求められました。

今、現実に置かれている日本のカトリック教会が、日本社会の中でどのような歩みをしていくのか、その中で、福音宣教はどうするのかを考え、生きるとともに、アジアの教会、世界の教会の動向に関心をもって見守りながら、「ともに旅をする」ために、さまざまな人に開かれた教会となり、シノドスが求めることにチャレンジを続ける歩みをこれからも続けていければと希望しています。

仙台教区広報委員会

新「ローマ・ミサ典礼書」による ミサ実施に向けて

皆さま既にご存知のとおり、新しい「ローマ・ミサ典礼書」が、来る待降節第1主日（11月27日）から実施されます。これは、2002年に改訂された「ローマ・ミサ典礼書　規範版　第3版」に基づく翻訳によるものです。加えて、2001年に典礼秘跡省から出された翻訳の指針に従って、「（規範版に）忠実な翻訳」を心がけたものとなります。

従来の日本語版は、1975年に発行された「ローマ・ミサ典礼書　規範版　第2版」に基づいて翻訳され、1978年12月に発行されたもので、日本の文化を考慮して、日本独自の適応を多分に含むものでした。（例えば、聖書朗読後に奉仕者だけが「神に感謝」と答え、会衆は沈黙を守ることや、叙唱前の二段階の対話句、聖体拝領前の信仰告白の祈りなど）

これらの個所が規範版に従って、聖書朗読後に会衆も「神に感謝」と答えたり、叙唱前の対話句は三段階になったりと、ミサ式次第と奉献文の一部の訳が改訂されます。

今回の改訂は、ラテン語規範版に忠実に翻訳するだけでなく、より豊かにミサを祝うためのものであり、外国籍信徒が増加している日本の教会の現状を反映させたものでもあります。ラテン語規範版に忠実に翻訳された各国語版のローマ・ミサ典礼書を考慮して、日本に住み日本語のミサに参加している外国籍信徒もスムーズにミサ参加ができるように配慮されたものでもあります。

仙台教区司祭団としては、月例会で式文の読み合わせを行い、2月末には梅村司教様をお迎えして、学びを深めました。詳細については各地区の司祭から皆さま方にお伝えしますが、この機会を単なる言い回しの変更ととらえずに、ミサの祈り、ミサの心を学ぶ機会としていきましょう。

仙台教区典礼担当　森田 直樹　神父

聖香油ミサと髙木神学生の助祭叙階式

ガクタン・エドガル司教司式による、初めての聖香油ミサと髙木健太郎神学生の助祭叙階式が、４月13日水曜日、カテドラル（元寺小路教会大聖堂）で執り行われました。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、非公開のミサとなりましたが、仙台教区の司祭が一堂に集まり、厳かにささげられました。

ガクタン･エドガル司教は、説教で「すべての務めを神の助けによって果たし、仕えられるためだけではなく仕えるために来られたキリストのまことの弟子であることを示してほしい」「清い心で信仰の秘儀を保ち、 口でのべ伝える神のことばを行いで示してください」と話されました。

助祭となられた髙木神学生は、この後聖週間のミサと典礼で、堂々と助祭の務めをはたされ、神学院に戻られました。皆さんと共に、仙台教区の新しい司祭誕生を願って祈りたい思います。

（仙台教区広報委員：関　毅）

髙木助祭から

いつもお祈りとご支援をありがとうございます。私は2022年4月13日、聖香油ミサの中で、ガクタン･エドガル司教様司式により助祭の叙階を受けました。コロナ対策のため非公開で行われましたが、皆様からの祈りに支えられながら、この叙階の秘跡を受けました。喜びと同時に「これから助祭の務めが待っているのだ。私にできるのだろうか。」という責任と不安が頭をよぎりました。そこで、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」（ルカ23･46）を黙想しながら、そして司式されるガクタン司教様の助け手となるべく、元寺小路教会にて奉仕いたしました。

現在は神学院に戻り、神学科４年として助祭コースに在籍し、週末は横浜教区金沢教会で司牧実習をしています。助祭としての務めを果たしながら、そしてさらに来るべき時のために、日々を丁寧に準備して過ごしています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

助祭 ミカエル 髙木 健太郎

各地区からのお便り

第６地区より

3年ぶりの合同堅信式

2022年６月５日聖霊降臨の主日、仙台教区カテドラルには、第６地区の小教区から25人の受堅者が集まり、３年ぶりに合同堅信式が執り行われました。

受堅者は使徒信条を唱え、信仰の決意を宣言した後、ガクタン司教による按手と塗油によって堅信の秘跡が授けられました。

コロナ禍のためミサの参列者は限られましたが、元寺小路教会大聖堂はガクタン司教様から堅信の秘跡を授けられた方たちと家族の笑顔であふれました。

ガクタン司教　説教（要旨）

今日は教会が聖霊降臨を祝い、このミサの中で25人の兄弟姉妹が堅信の秘跡を受けるということで、教会全体が喜びに満ち溢れていて、本当にうれしく思います。

第一朗読にあるように「(この日に)一同が集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いていた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、『霊』が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。」

聖霊が信者たちに風のような力を送って彼らが帆を張った船のように進んでいくのです。これは、神が弱い人間を不思議な力で支えてくださる体験です。また、神の霊が人間の心に働きかけて人々の間にお互いの理解をもたらしてくださるのです。

皆さんが洗礼を受けた時にはさまざまなきっかけがありました。子供の時に洗礼を受けた兄弟姉妹もいます。皆さんのご両親は子供が神のいのちにあずかるように、という思いを持って皆さんの洗礼を望んでいました。大人にとって洗礼というのは自分の生き方が何か落ち着いたとか、平安が与えられるようにとか、といった恵みです。

信仰が身に付くというのは、洗礼を受けたら、その時から信仰の全てが分かる信者になるわけではありません。洗礼の恵みをいただいて生きること、信仰を身につけて行くということは少しづつということです。

今日の福音でイエスが「聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」と約束されています。私たちがいろいろな経験を通してイエスの語られた言葉の意味を理解していくのです。聖霊の導きは、イエスが語られたことを、私たちにもっと深く理解させ、私たちが私たちの現実の中でイエスの言葉をどう生きるべきかをはっきりと示すことです。イエスは私たちのそれぞれのペースに合わせて共に歩んでくださるのです。

堅信の準備の勉強で、使徒パウロの手紙が教会を人の体と例える箇所と出会ったと思います。体は一つですが、体の部分は違っている、というところです。耳のような人もいれば、足のような人もいる。教会というのは、違っている人々が入って、一人一人の力によって助け合い、一つの共同体になるのです(1コリント12:12-26)。私たちが助け合って生きていくということは、一人一人に聖霊の働きがあるということです。

私たちはみんな弱い人間です。皆さんのこれからの歩みの中でいろいろなことがあるでしょう。苦しいことや失望することがあって、倒れ込んでしまうこともあるかもしれません。そういう時、今日の福音の言葉を思い出してください。「(弁護者は)永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。」

私たち一人一人の心にこの言葉が届きますように。そう願いながら、この堅信式を行います。

第5地区より

〈西仙台教会〉２年越しの聖週間

今年の聖週間は、西仙台教会にとって画期的な出来事でした。なぜなら、約20年ぶりで聖週間の典礼を行うことができたからです。

ことの発端は、昨年の１月でした。西仙台教会は、近年聖週間については元寺小路教会の合同典礼にあずかることが多かったのです。しかし、コロナ禍の状況においては、他小教区所属の信者を気軽に合同ミサに受け入れるような状況ではなくなりました。その関係で、2021年1月の教会委員会で、西仙台教会での聖週間の典礼の進め方について、話し合いを持ちました。

西仙台教会では、長い間、聖週間の典礼を行っておりませんでしたので、はたしてできるかどうか、そして準備をしてもコロナ禍で本当に典礼が可能なのか、大変迷いました。話し合いでは、いろいろな意見がでてきました。

例えば、「実行するに当たっての準備を事前に確認し、話し合うことが必要であるがコロナ禍の時期、集まる時間を増やすことは妥当なのだろうか？　教会典礼の頂点である聖週間の意味を受け止めた上で、それぞれが家で祈ることが

あっても良いのではないか。その事も準備の一部となるのではないか。その意味で準備をするのは教会委員だけであってはならない。信徒全体で心の準備をしていかなければいけない。」などが話し合われました。そのような大変長い話し合いの後、次のような結論に達しました。

すなわち、「今回の機会を『聖週間典礼の意味』を考える大切な機会として、まず準備を進めてみる。仮に典礼が実現できなくとも、1人1人に御復活を迎える黙想の機会としたい。（コロナ禍のために中止もありうるので）実際に典礼を行えるかどうかの結論は、司式予定の李錫神父様との話し合いの後、再検討して出す。」というものでした。

準備は比較的順調に進みました。そして、なんとかできるのではなかろうか、という所まで進みました。しかし、3月中旬に仙台市から「まん延防止等重点処置」が出されたので、仙台市内での公開ミサは中止となりました。つまり、やっとできるのかな？　と思った瞬間にできなくなってしまった訳です。

その後は、長い間の公開ミサの中止と短い間のミサ再開を繰り返しながらの大変辛い期間を過ごしていました。そして、約1年がすぎ、今年の4月3日から、ようやく公開ミサが再開されました。

折しも、聖週間の10日ほど前です。聖週間には、李錫神父様が来られることが決まっていたので、「もう、頑張るしかない。」という思いで、取り組みました。

聖週間の間、遠方から初めて西仙台教会に来ていただいた方がいたり、思わぬ方が参加されたり、さまざまな出会いがありました。コロナ禍の中、2年越しで準備を続けて、やっと迎えることができたこの聖週間。この経験は、間違いなく私たちの財産となることを確信いたしました。

私たちをここまで引っ張っていただいた李錫神父様に感謝いたします。

上野　隆（西仙台教会）

第7地区より

野田町教会・松木町教会合同ミサ・堅信式

福島市の野田町教会で5月1日（日）に野田町教会と松木町教会の合同堅信式が行われました。この日はガクタン司教様が司教叙階後、初めての堅信式ということで、私たちもいつも以上に準備を整えてお迎えしました。ミサは午前11時からでしたが、その2時間前から信徒たちが集まり、最初の1時間は「信徒と司教様との交流」

で司教様への質問タイム。次の1時間は「司教様と堅信を受ける子どもたちとの時間」として、「堅信を受ける16人の子どもたちへ司教様から伝えたいこと」などを話してくださり、ミサの前にとてもとても貴重な時間を過ごさせていただきました。とりわけ、堅信を受ける子どもたちとの時間は、子どもたちの緊張を和らげ、司教様への親しみも増したようでした。司教様の教会や信徒の皆さんのことをよく理解したいというお気持ちが感じられました。

コロナ禍ではありましたが聖堂にはたくさんの人が集い、厳かな雰囲気の中、ミサ・堅信式が行われ、神様への賛美をささげました。

渡邉　祐子（野田町教会）

第8地区より

シャルル・ド・フーコー列聖のお祝い会〈イエスの小さい姉妹の友愛会〉

本宮市営「老人憩いの家あぶくま荘」のそばに、イエスの小さい姉妹の友愛会のシスターが生活

しています。ロザリア光枝さん、ヴェロニカ晴子さん、サビナス久美子さんの３人です。姉妹たちは聖シャルル･ド･フーコーの生き方に倣って東日本大震災後、福島県に修道院を移し、白河市、その後本宮市で被災地域の人々と共に暮らし始めました。

聖シャルル･ド･フーコー

列聖感謝ミサをささげる佐藤修神父と塩田希神父

「小さき姉妹会」では６月８日（水）に修道院「友愛の家」でフーコーの列聖を祝いました。列聖感謝ミサは、和歌山市の「イエスの小さい兄弟会」から塩田希（のぞみ）神父が来て、佐藤修神父と共にささげられました。感謝ミサには郡山教会から１６人、二本松教会から２人の信徒が参加しました。ミサ後、喜びのうちにささやかなお祝いもしました。

小湊 博子（郡山教会）

教区の諸活動

各地でささげられた 3.11 東日本大震災 追悼･復興祈願ミサ

〈元寺小路教会〉

「3.11 東日本大震災 犠牲者追悼･復興祈願ミサ」が、今年も仙台教区カテドラル 元寺小路教会でささげられました。コロナ禍ということで、今年も、関係者のみという形をとったため、参加者は 35 人に留まりました。

ミサは、14時30分の司祭の入堂後、地震発生時刻の 14 時 46 分まで、静かにパイプオルガンが奏でられました。

14時46分の鐘の音とともに黙祷をささげ、平賀徹夫名誉司教の主司式で、小野寺洋一神父と共にミサが静かに始められました。

説教の中で、小野寺神父は、「11 年目に当たる今日、被災者の方々を忘れることなく、こうして、また皆さまと心を一つにして祈ることができることを感謝いたします。」と、ベースで中心となって被災者支援をしてくださった方、現在も支援し続けてくださっている方、スタッフとして尽力してくださった方、ボランティアとしてご協力してくださった方々、各教会の信徒の方々、いつもお祈りで支えてくださった方々、とそれぞれの働きに感謝を述べられました。

次いで、ご自分が感銘を受けた４冊の震災関連の文庫本を１冊ずつ挙げて、その内容を短く紹介しながら、改めて11年間を振り返り、その

道のプロでもない私たち一人一人が、それぞれの場でできることをやり続けてきたことを振り返りました。

本当にうれしかったことは、エメ神父様が、私たちのカリタスとしての活動が、教会のことだけにとどまらず、信徒だけでなく、周囲の困っている人々に目を向け、手を差し伸べて支援したことによって、「日本の教会が、やっとカトリック教会になった」と言われたことでしたと触れ、みんなが力を合わせて、活動をしながら支援を続けることによって、被災を受けた人が苦労をしながらも、その中から立ち上がってくださっていることは、うれしいことです、と分かち合ってくださいました。

参加者の中には、「2022年3月11日は、忘れもしない2011年3月11日から、11年目で、何よりも東日本大震災の日と同じ金曜日なんです。何となく、最近の地震の多さが気になっていて、また、地震が来るような気がして……」と、ちょっと不安げに来られましたが、東日本大震災のためのミサがあるかどうかも定かではないのに、元寺小路教会で静かに落ち着いて祈りたいので来ました、という方もおられました。

また、最初のボランティアの泥掻きから、お茶っこによる傾聴活動にいたるまでの支援活動をしてくださっていた横浜教区の夫妻も来られ、石巻ベースで「チーム カリタス仙塩」としてボランティアをしてくださった北仙台教会の方々、一本杉教会の方々、元寺小路教会の方々などを中心にご参加くださった方々が、お互いに、久しぶりに顔を合わせ、活動で出会った人々や、亡くなられた方々に思いをはせ真剣に祈っておられました。

（仙台教区広報委員：Sr.長谷川 昌子）

〈原町教会〉

東日本大震災犠牲者追悼と復興祈願ミサ
（3月11日、午前11:00）

東日本大震災から満11年。大地震で原町教会は損壊し、大津波で肉親、親戚、知人をなくし、原発の爆発事故では避難せざるを得なかった信徒の方々が多くいました。

原町教会ではそのような犠牲者のために「東日本大震災犠牲者追悼と復興祈念ミサ」が開催されました。司式は幸田和生司教様です。当時に思いを寄せて、15人の方々がミサにあずかり犠牲者を追悼しました。

説教の中で司教様は「津波で亡くなられた方々、震災関連死で亡くなられた方々のほとんどはキリスト信者ではありません。私たちはその方々の死をどのように受け止めればいいのでしょう。」と問いを投げかけられました。そしてヘロデ大王の時にイエス様の身代わりになって皆殺しにされた２歳以下の幼子が教会で殉教者として祈念されていることを話され、「幼子たちは

イエス様を知らなくてもイエス様の十字架・受難に結ばれていたのではないか、（中略）…… そこから、津波や原発事故によっての避難生活で亡くなられた方もイエス様の受難、十字架に結ばれていたのではないかと思う。だとすればその方々もイエス様と共に復活の命にあずかっているのだと、そう信じて希望して祈ることができると思う。新型コロナウイルス感染症で亡くなっていく方々、そしてウクライナの戦争で亡くなった大人と子ども、男性と女性、みんなイエス様の受難、十字架に結ばれ、イエス様の命に結ばれている。私たちはそう信じることができると思います。そして被災地の全ての方々がイエス様に励まされて歩むことができますように。（後略）」と結ばれました。

私たちは、震災で家族が、知人が、亡くなったことについて時が経ても心の底から納得することはできずにいます。「なぜ？」と問い続けています。亡くなった方々がイエス様の受難、十字架に結ばれイエス様の復活の命に結ばれていると信じることができれば残された方々も救われます。

高野 郁子（原町教会）

〈大船渡教会〉

3.11ガクタン被選司教様による追悼ミサ

東日本大震災から11年を迎える3月11日、時の経過とコロナ禍のためにミサや式典が縮小されていく中、大船渡教会では毎年その日に追悼のミサを行なうことを決めており、ミサの準備を進めているときに、教区の小松史朗神父様から、ガクタン・エドガル被選司教様が追悼ミサをささげに大船渡教会に来てくださるというううれしいご連絡をいただき、心が躍りました。

当日、私はカリタス大船渡ベースで到着をお待ちしました。司教様がお着きになると、ベースでボランティアさん達がそうするように「ただいま！」「おかえりなさい！」と５年ぶりの再会を喜び合いました。ベーススタッフと近況を伝

え合い、前ベース長の司教様と現ベース長の私とでベースの今後の在り方などのお話をして、教会に向かいました。

信者さんたち約20人の大歓迎を受けて、午後1時30分から追悼のミサがささげられました。祭壇には津波で亡くなられた５人の信者さんのお名前と、流失した旧納骨堂に安置されていた11人の方々のお名前を記した色紙が飾られました。説教の中で司教様は、震災によって愛する人を失い、家を失い、仕事を失って、人生を変えられてしまった方々に思いを寄せ、また日本のカトリック教会がオールジャパンの体制で支援活動をしてきたことに感謝し、そして仙台教区が掲げた「新しい創造」にこれからも取り組んでいくことを話されました。

ミサ後、震災が発生した午後2時46分に市のサイレンと教会の鐘が鳴り響く中、黙祷をささげました。大船渡教会はこの様子を、若い信者さんが中心となってライブ配信を行いました。

カリタス大船渡ベース ベース長
菅原 圭一（大船渡教会）

〈オリーブの会〉

東日本大震災11年
亘理で被災者と共に震災犠牲者追悼と復興祈願を祈る！

私たちオリーブの会のメンバーは、3月11日に亘理教会、荒浜慰霊碑広場そして震災で娘さんを亡くされた板橋さち子さん宅跡地で「東日本大震災犠牲者追悼と復興の祈り」を共にささげました。

亘理地区では264人が亡くなられ、行方不明者は8人です。亡くなられた方の中に亘理教会板

橋さち子さんの娘さん万里子さん（当時25歳）もおられました。

亘理教会でのミサは13時から行われ司式はミゲル･ヴァレラ神父様、祭壇奉仕者は髙木健太郎神学生、先唱は長嶋治夫（亘理教会）が担当しました。

このミサには、約20人の方が参加されその中にはオリーブの会に参加されている被災者の方も初めて2人参加されました。

発災から11年、犠牲となられた皆様の永遠の安らぎと被災地の復興、被災者一人一人に新たな希望と力を願って祈りました。

ミゲル神父様は「全ての人のこの世の命は、震災、戦争やコロナ等、何で、どんな時に終わるか誰もわからない、しかし神様の前には命の終わりはなく、永遠の命として大切にあずかってくださる」と話されました。

それからウクライナでの戦争の一日も早い停戦と、平和の実現のために祈り、ウクライナへの献金が行われました。オリーブの会の野田和雄さんがウクライナ製とロシア製のビスケットを持参されたので平和を願いながらいただきました。

荒浜の慰霊碑の前で14時46分に黙祷と献花が行われ、集まった一般の方もともにミゲル神父様の司式で祈りをささげました。

その後、鳥の海南側にある板橋さち子さん宅跡地で万里子さんの追悼の祈りを唱えました。

オリーブの会　小野 武（元寺小路教会）

2022年いのちの光3.15フクシマ「福島の真実」

講師：飛田 晋秀（写真家）

飛田 晋秀さん

「2022年いのちの光3.15フクシマ」元寺小路教会での集会は、コロナウイルス蔓延防止のため、ビデオでの開催になりました。

飛田さんは、もともとはさまざまな職人の姿を撮影するカメラマンでしたが、3.11東日本大震災後、現地に入ってその被害状況の撮影を始め、世界各地で、ご自身の写真の展示、撮影時の現地での体験についてお話を続けています。今回の集会では、東京電力福島第1原発事故後11年間の、原発事故被害の状況、放射線汚染状況、帰還困難区域の状況をお話しくださいました。

飛田さんの話では、国や県が不完全な除染のまま、線量の情報を伏せて住民の帰還を急いでいる面があります。例えば、常磐線が一昨年開通しましたが、駅とそこへ行く道路周辺はかろうじて通常レベルに近い段階まで除染されていますが、一歩奥に入ると線量はまだまだ高いレベルです。駅舎や学校などの建物には惜しまずお金をかけるが、住民が安心して生活できるレベルの線量までの除染は行き届かず、その情報も知らせずに帰還させることを急いでいます。双葉町に建設された伝承館ですが、駅から伝承館までの道路の両脇は帰還困難区域です。こうして、見せかけの復興を強調しています。県外から若い人々が移住しておりますが、その人々への町や県や国からの線量の説明を聞いたことがないし、福島県の新聞は、帰還区域の放射線量を全然発表していません。今、復興住宅から少し離れて除染していない所へ行くと、3マイクロシーベルトはざらにありますと強調されました（震災以前は0.03～0.07ぐらいと言われております）。

また、双葉病院では震災時にたくさんの寝たきりの人々が放置されて亡くなった事をあげて、宮城県の女川で原発事故が起きた場合の避難訓練はこのような弱い立場の人々のことまで想定してなされているのか？と問題提起されました。

さらに、現在問題になっているトリチウム汚染水の海洋放出ですが、国は保存タンクを作る場所がないと説明していますが、広大な敷地が沢山残っていることを写真で示されました。そして、除染がなされたとして避難解除になると固定資産税がかかるようになるが、まだまだ住めるレベルではない点、さらに家屋を解体して更地にすると固定資産税が6～7倍になる点、売地にしても買い手がつかない点など強調されました。

今後問題になる点として、現地で働く労働者の被爆の問題や、帰還された人々の被爆の問題があるが、自己責任でかたづけられるのではないか？と、大きな疑問を提起されました。

（ビデオ記録のサイト：
https://www.youtube.com/watch?v=akBs9uvRjsY）

（仙台教区広報委員：上野 隆）

〈仙台教区青年会から〉

Let's meet the members!

こんにちは! 私は青年会のマイカです。この青年会での日々は、教会での活動や、課外での楽しい活動など、私に多くの経験を積ませてくれます。またこれら全ての経験を、決して一人ではなく、神様に仕えるという、カトリック教会の青年として同じ志を持った仲間と一緒に行っています。この青年会での私たちのゴールは、イエスキリストの使者として生きるように、また聖霊と一つになるように、若い世代に働きかけていくことです。石垣 マイカ（フィリピン）

青年会では私のことを秀（ひで）または秀成（ひでなり）と呼んでいます。私にとって青年会

とは、仲間と互いに喜び分かち合える場所だと思います。また、私はいろいろな行事などに参加することで、みんなさんと心を深めることができ、神様の恵みも深めることができると信じています。　斉藤 秀成（フィリピン）

青年会の人は皆私をこう呼びます､｢the cook｣もしくは｢the president｣。ご挨拶が遅れました、私はこの青年会の副会長、カルロスと申します。私にとってこの青年会は、親睦を深め、｢freinds｣(青年団での呼び方) とともに成長していく場です。副会長として、私はこう信じています、『ともに日々を過ごす中で､若人は神の恵みについて多くを学んでいける』と。例えばそれは、同じ時間を分かち合い外に赴く中で、愛について学ぶことであったり、この世界の美しさを尊ぶことであったりするでしょう。

カルロス（インドネシア）

こんにちは、私は昨年 2021 年からこの青年会に参加している、ナナと申します。私にとってこの青年会は、単なるグループではなく、私の家族のようなものです。この青年会の人は、皆才覚に溢れ、素晴らしい人々です。そのような人と知り合うことができ、私はとても感謝しています。また、このような青年会は、単に素晴らしい居場所を提供するだけでなく、カトリック教会の活動へより深く関わっていくための非常に良い方法であると、私は考えます。この青年会が益々の発展を迎えることを祈念しております。私としましても、私の創造性、知識、そしてやる気等、この青年会と青年会の皆のためなら、私にできることを何でもしたいと考えています。

ナナ・ソト (メキシコ)

こんにちは！私の名前はフェリアーディです。青年の方、ぜひ私とお友達になりませんか？私は青年のためのミサで典礼聖歌の責任者を務めています。私がこの青年会に参加した目的は、活発的に活動することで新しい「家族」を作ることです。何故なら私の家族は遠く離れた地、故郷インドネシアで暮らしているためです。それだけでなく、私はこの青年会で、特にミサの中でオルガンを演奏することで、より多くの日本人が教会を訪れるようになることを願っています。私たちの教会の未来は若者の手に委ねられていると、私は信じています。

フェリアーディ（インドネシア）

訃　報

ロベール・ベルニア神父
（ケベック外国宣教会）

ベルニア神父は､1954年～2000年までの46年の長きにわたり、日本で福音宣教にあたりました。

三沢教会(三沢市)、塩町教会(八戸市)､浪打教会(青森市）で司祭として宣教司牧にあたり、光星学園、明の星高校、白菊学園において教師として活躍しました。

そのほか、仙台教区内の小教区の台帳関係の電子化に貢献しました。

〈略歴〉

1954年　来日
1955年　三沢・塩町教会助任司祭
1958年　光星学園　教師
1960年　明の星高校　教師
1961年　カナダへ帰国
1962年　明の星高校　教師
1966年　白菊学園　教師
1975年　ケベック会日本管区　管区長
1982年　浪打教会主任司祭
1992年　ケベック会青森本部付き
2000年　カナダへ帰国
2022年　ケベック会本部にて､5月22日帰天 96歳

ルシュエン・ボーリュウ神父
（ケベック外国宣教会）

ボーリュウ神父は、カトリック大湊教会(むつ市)の主任司祭として働かれたほか、青森本町教会(青森市)でも主任司祭として宣教司牧に従事しました。

また、ケベック外国宣教会の日本管区長を1970年～1973年まで務めました。その後、カナダの神学校でも養成担当者として活動し、後輩の育成やカナダ本部でも活躍しました。

〈略歴〉

1952年　来日
1955年　大湊教会助任・主任司祭
1961年　本町教会（旧浜町）
1967年　ケベック外国宣教会　本部業務
1970年　ケベック外国宣教会 日本管区管区長
1973年　カナダへ帰国　その後､カナダにて後輩の育成にあたる
1992年　カナダ管区管区長、その後引退
2022年　ケベック会本部にて､5月27日帰天 97歳

私のフランス聖地巡礼記〈第1回〉

リジュー、そしてルーアンへ

2021年11月23日から2022年1月31日までの70日間、私はフランスに滞在し、各地の聖地巡礼・教会巡りをしてきた。

いわき教会の主任司祭であったチェスワフ・フォリシュ神父が、ヨーロッパを旅行するならクリスマスか復活祭の時季が良いですよ、と常々語っておられていたので、待降節からクリスマスを経て新年をフランスで迎える計画を、ずっと以前から温めてきた。そして、幼いイエスの聖テレーズのリジューを訪ねることが、この巡礼の最大の目的であった。私は数年前から、リジューの聖テレーズの著作の邦訳や、彼女について書かれたさまざまな本を読んでいくうちに、『ある霊魂の物語』（邦訳『幼いイエスの聖テレーズ自叙伝　その三つの原稿』）の中で、tout petit（注）という言葉に出合い、聖書の読み方について、キリスト教の信仰について、全く新しい啓示を受け、彼女の著作全集を始めとするフランス語の原書まで買い求めて、彼女が発見した言葉tout petitへの探求を始めていたところであった。

サン・ピエール（聖ペトロ）・バジリカ聖堂（アランソン）

私の巡礼は、パリのバック通り、聖カタリナ・ラブレの不思議のメダイユ・ノートルダム礼拝堂のミサから始まり、リジューには、12月13日から12月21日まで滞在した。聖テレーズ・バジリカ聖堂、そのクリプト（地下礼拝堂）、カルメル会、テレーズ一家の家（ビュイソンネ）、サン・ピエール大聖堂などを訪ねた。ミサは2回、テレーズ聖堂クリプトであずかった。カルメル会の礼拝堂にはテレーズの棺が安置されているが、私はどうしても写真を撮る気になれなかった。私はこの礼拝堂に2回入っているが、ここを訪れる人で、スマートフォンを取り出したり、写真撮影をした人を見たことはなかった。書店ではテレーズ関係の本を買ったが、ついでに書店の人に質問して、彼女の使ったフランス語訳聖書が間違いなく1873年刊行のグレールGlaire聖書（注）であることも確認できた。

彼女の4人の姉たちは、レオニーだけがカンの修道会に入り、他の3人はこのリジューのカルメル会の修道女となった。5人姉妹全て修道女となった奇跡の家族マルタン一家の原点であるアランソンも訪ねた。聖テレーズ礼拝堂に隣接するテレーズの生家と、彼女たちが受洗したノートルダム・バジリカ聖堂などを訪ねた。彼女たちの両親ルイとゼリーのマルタン夫妻も列福され、フランスではすでに聖人である。今回の巡礼中、このアランソンが一番私の心に残った。

聖ジャンヌ・ダルク教会（ルーアン）

リジューから移動して、クリスマスを過ごしたルーアンも、忘れがたい。ルーアンは芸術都市として知られるが、私にとっては、聖ジャンヌ・ダルク、ブレーズ・パスカル、ギュスターヴ・フローベール、遠藤周作のルーアンであった。遠藤周作の足跡こそ確かめられなかったが、他の3人については大きな収穫があった。特に、フローベール生誕200年の記念の年に当たっていたので、市の図書館で、『ボヴァリー夫人』の創作ノート他の貴重な資料を閲覧するという幸運に恵まれた。12月24日のクリスマス夜半ミサはサン・ティレール教会、12月25日のクリスマスミサはノートルダム大聖堂であった。後者のミサは、フランスの伝統にのっとり、壮麗・荘厳な音楽ミサの中で、陶然とするものであった。

今回の巡礼中、全国至るところの教会で、ミサは新しく変更されたフランス語の典礼文が採用されていたが、ミサの中で「フランスの伝統」という言葉を聞くことが多かった。ルーアン滞在の3週間に、市内の教会で、10回のミサにあずかることになった。

（注）『ある霊魂の物語』の原稿に、グレール聖書から箴言9・4の引用があり、その中で示されるtout petitは、「幼子のような小さな者」「正真正銘の子供」などと解釈すると、わかりやすい。

薄葉　健二（いわき教会）

司　祭　紹　介

ヨハネ・マリア・ビアンネ 板垣 勤

○生年月日
1949年(昭和24年)
9月18日
○出 身 地
岩手県花巻市
○出身教会　花巻教会
○司祭叙階
1984年3月20日
四ツ家教会

司祭叙階の恵みをいただいて38年が過ぎました。一人の信徒、司祭としての歩みを振り返ると、お前は何をしてきたんだ、今何をしているんだとの声が心に響いて来ます。神様はもとより、家族や信徒の皆さんに支えられて来たのに、どれほど感謝し、それを表しただろうかと心がうずきます。とりわけ家族の一人にも信仰を伝えられないでいることは申し訳ないと感じています。

司祭叙階までの歩みは、5歳頃にシスターを見た記憶、陸上自衛隊生活と東京での元カトリック信徒と自称する人との出会い、花巻教会のゲーヴィレル神父との出会いなど、自分でも不思議なことの連続です。

しかし、それらは神を信じ、神のために生きる道を考える歩みでした。中でも短期間ですが統一教会の人との関りは、司祭の道に目を向けるきっかけになっています。洗礼の準備をしているとき、統一教会の人など間違った信仰に気づかないで、一生を棒に振る人たちを思い出したのです。

自分は幸いにカトリック教会にたどり着いたのですが、彼らのために出来ることはないかと考え始めました。その時、宣教師として生きるゲーヴィレル神父の姿を見て、自分も同じようになりたい、信仰に迷っている人たちを助ける人になれればと思うようになりました。

そこから、司祭への歩みが始まったのですが、その歩みは順調ではありませんでした。それは、今も同じ思いがどこかにありますが、「司祭叙階は恵みであるものの、自分は司祭になっていいのだろうか」という悩みで、何度も辛い時を過ごしました。

それが司祭になって間もなくの職務放棄につながりました。その辛い時、佐藤千敬司教や神学院長 早副穣神父に助けられたので、今の自分がいます。

私はいまもって信仰の未熟者ですが、「イエス・キリストの力は偉大であり、いつもあなたを助けることがおできになります」と信じて、心から喜び、共にいてくださる神に感謝しています。

これからも、信徒の皆さんとともに、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」(Ⅰテサロニケ 5·16 ～18)と呼びかける神に応えられるようになりたいと願っています。

信徒の皆さん、神を信じ、神に希望を持って、あらゆることに感謝して生きましょう。

この機会に好きな祈り、みんなで祈りたいニューマン枢機卿による「祈り」、マザーテレサも大切にして祈った「祈り」を紹介します。

主よ、光を与えてください。
私がどこにいても、あなたの香りを放つことができますように助けてください。
私の心をあなたの霊と命で溢れさせてください。
私の生活のすべてが、ひたすらあなたの光を輝かすものとなりますように、
私のすべてに染み通り、私をとらえ尽くしてください。
あなたの光を輝かせる者として、私をお使いください。
私が出会うあらゆる人々がその光の中に、あなたの御姿を感じることができますように、私の内で輝いてください。
主よ、人々がもはや私ではなく、あなただけを見ますように、私とともにいてください。
そうしてくだされば、私もあなたのように、他の人々への光となって輝き始めることでしょう。
主よ、光はすべてあなたからのもの、私からの光などではありません。
人々を照らすのはあなたですから、私はただあなたの道具に過ぎません。
あなたがこの上なく愛されたように、私が周りの人々を照らすことによって、あなたを賛美させてください。
言葉ではなく、私の生き方、私のあなたへの愛によって、あなたをすべての人に、宣べ伝えることができますように。
アーメン

2022 年度　仙台司教区 司祭派遣地

太字：新任、転任

仙台教区本部　教　区　長：**ガクタン・エドガル司教**
司教総代理：**板垣　勤**
教区事務局長：小松　史朗
教区会計：小野寺　洋一

2022 年 8 月 1 日付

地区	小教区	担当司祭　◎印は地区長	前職・前任地
第 1 地区	本町(松ヶ丘)、浪打、黒石、五所川原、弘前	◎板垣　勤 (仙台教区) **李　錫／イ　ソク** (韓国光州太田教区)	第 5 地区
第 2 地区	十和田(五戸)、三沢、八戸塩町、鮫町、野辺地、大湊、久慈	◎ゲストヴェオ・ギャリー (淳心会) **カストロベルデ・パトリック** (淳心会)	第 1 地区
第 3 地区	四ツ家、上堂、志家、花巻、北上、遠野、宮古、釜石、大船渡	◎渡辺　彰宏 (仙台教区) 川崎　忠紀 (仙台教区) 堀江　節郎 (イエズス会)	
第 4 地区	気仙沼、水沢、一関、千厩、築館(新生園)、米川	◎高橋　昌 (仙台教区) 佐藤　守也 (仙台教区) ロペス・ホセ・アウセンシオ (グアダルペ宣教会)	
第 5 地区	古川、石巻、北仙台、東仙台、西仙台、塩釜	◎森田　直樹 (京都教区) 兪　鍾弼／ユ　チョンピル (ドミニコ会) メヒア・タデオ・ラファエル (グアダルペ宣教会)	
第 6 地区	元寺小路、八木山、一本杉、畳屋丁、亘理、角田、大河原、白石、原町	◎小野寺　洋一 (仙台教区) 幸田　和生　名誉司教 (東京教区) ミゲル・ヴァレラ (グアダルペ宣教会) 小松　史朗 (仙台教区) 佐々木　博　協力司祭 (仙台教区) **イグナシオ・マルチネス**　協力司祭 (グアダルペ宣教会)	カトリック中央協議会
第 7 地区	会津若松、喜多方、南会津、松木町(桑折)、野田町	◎ボルデュック・エメ (ケベック外国宣教会) **ポール・トー**　協力司祭 (ケベック外国宣教会)	ケベック外国宣教会本部
第 8 地区	二本松、須賀川、郡山、白河、いわき(湯本)	◎佐藤　修 (仙台教区) 会津　隆司 (仙台教区) マルコ･アントニオ･デ･ラ･ローサ (グアダルペ宣教会)	

〈小教区以外〉
引退：平賀　徹夫　名誉司教
鷹觜　達衛
土井　勝吾
首藤　正義

療養：氏家　和仁

〈離任〉
第 2 地区　レクダク・ゲラドス・ジェリー（淳心会）　インドネシアへ帰国
第 7 地区　ノーサル・ヴァツラフ（サレジオ修道会）　サレジオ会本部へ

編集後記

今回もなんとか、発行できました。最近、皆さま方の自発的投稿が増えているように感じております。それは、とても良いことだと思います。ぜひ、みんなが参加して作る教区報を実現しましょう。

仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は随時受け付けていますので、下記のメール宛てに添付ファイルでお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。（上野 隆）

sendaikyoukuho@gmail.com　**次号発行予定日：12 月 4 日(日)　原稿締め切り：9 月末日**